

# 字音直読資料としての高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴経

——漢音系字音の混入について——

榎 木 久 薫

## 目次

はじめに

- 一 新訳華嚴経呉音直読における漢音系字音の混入
- 二 混入漢音系字音より見た新訳華嚴経字音直読の性格  
まとめ

## はじめに

「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴経」は、鎌倉初期に高山寺の明恵を中心とした華嚴教学集団において、呉音字音直読された文献である。稿者は先に、高山寺において本文献の調査を行ない、基礎的な整理の報告及び加點字の分韻表の形での報告を行なった。本稿はこれらの報告に基づき、「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華嚴経」の漢字音の性格の一面を明らかにしようとするものである。

華嚴経の呉音字音直読が本文献以前に見られないこと、またこの様なことが華嚴経に限ってのことではなく、他の経

典においても、院政・鎌倉初期に至って呉音字音直読が文献上に見られるようになることを、沼本克明氏が指摘しておられる。<sup>(3)</sup>このことについて、沼本氏は、平安初・中・後期には經典の呉音直読が正式な学問の対象とされていなかったためという解釈をしておられる。この解釈は更に、ではなぜこの時期に至って經典の呉音字音直読が文献上に見られるようになったのかという問いを生む。この問いに対しては仏教史と国語史の双方からアプローチする必要があると考えられるが、稿者は国語史研究の側から、この問いへの解答を得たいと考えている。具体的には、華嚴經の呉音字音直読の最初の文献と目される「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴經」の漢字音を、日本漢字音の歴史的変化の中に位置付けることによって、手掛りが得られるものと考えている。

本稿はその内、加点中に見られる漢音系字音を抽出し、本文献の漢字音の性格の一面を明らかにしようとするものである。

#### 一 新訳華嚴經呉音直読における漢音系字音の混入

本文献が加点された時期には、高山寺において「新訳華嚴經音義」「貞元華嚴經音義」が作成されている。このうち「新訳華嚴經音義」の掲出字と本文献の加点字を比較すると、本文献の加点の参考文献の一つとして「新訳華嚴經音義」が用いられたことが分かる。<sup>(4)</sup>その「新訳華嚴經音義」及び「貞元華嚴經音義」において漢音系字音が見られることについて、沼本氏が指摘しておられる。<sup>(5)</sup>これに対して、本稿は実際の經典読誦において見られる漢音系字音の様相を明らかにしようとするものである。

漢音系字音の認定は、呉音・漢音の体系が明らかでない現状においては、誤認の可能性を完全には排除できない。他の字音資料及び理論的に想定される漢字音に基づいて、漢音系字音である蓋然性の高いものを取り上げた。但し、後に述べるように、本文献では片仮名音形が漢音形であっても、声調は広韻の体系に外れるものが多く見られるので、呉音・

漢音の違いが声調の違いであるものについては、取り上げなかった。

また、次の用例のように、声点による清濁表示も完全に弁別的であるか疑問があるので、呉音・漢音の違いが清濁の違いであると想定されるものは、検討の際に区別することとした。

欄(薄墨朱去)ラン楯(薄墨朱平)シユン軒(薄墨朱去)カン檻(薄墨朱上濁)ケム 三・12

欄(去)ラン楯(平濁)シユン 三・78

沼本氏は「法華経」「大般若経」の呉音字音直読文献における漢音系字音の混入を整理しておられる。<sup>(6)</sup> 本稿では、氏の整理の枠組みを参考としながら、用例を

1. 語音として漢音形が使用されたと考えられるもの
  2. 本文中に呉音形の加点の見られないもの
  3. 本文中に呉音形の加点の見られるもの
- の三つに整理分類した。なお、1. と 2. 3. とは分類規準が異なるので、1. に分類したものも 2. 3. 中に含まれる。これらについては、用例に\*を付した。

### 1. 語音として漢音形が使用されたと考えられるもの

用例は次の通りである。

聾(東直來平)

聾(平)リヨウ聾(平)クキ 三・70

(一切 卷一元3・卷二〇 五六7)

擁(鍾影)三上七

擁(去)キヨウ滯(平)タイ 三・68

(擁(上)キヨウ滯(平)タイト、コホル 色葉 上カ疊字94ウ5)

泥(齋開泥去) ↓法華

泥(墨平濁)テイ潦(墨平)レウ 五・298

(一切 卷一 三三4)

覲(眞群)三去

観(平)キン 謁(入)エツ 一七・453

(観謁キンエツ 色葉 下キ量字 64才2)

伋(真)日去)

七(入)伋(去)瀧シン 二七・387

(二切 卷一 三三6)

鴈(刪)開疑去)

覺(平)フ 鴈(去)瀧カン 六四・22

(二切 卷二 一〇五6)

關(刪)開見平)

關(平)クワン 關(入)ヤク 三三・338 (他に類例3例)

(二切 卷四麗三九三中21・卷九一五二・卷二二 五三6)

機(上)キ 關(平)クワン 三三・B 121 (他に類例1例)

(機(平)關(上)過客ノキクワン 色葉 下キ量字 63ウ1)

艱(山)開見平)

艱(去)カン 難(平)ナン 不(上)フ 憚(平)タン 六六・75

(二切 卷六麗四三〇中5・卷二三 六五七1)

攘(陽)開日去)

攘(去)瀧)シャウ 臂(入)平)ヒ 六六・159

(二切 卷四麗三八九中23・卷七麗四三三下12・卷二二 六四八8)

哽(庚)直開見上)

哽(去)カウ 噎(入)エツ 七七・580

(哽カウ咽エツ ムス 色葉 中ム量字 43ウ2)

(二切 卷二 一〇三6)

赫(陌)直開曉入)

赫(入)カク 突(入)ヤク 一・51

(二切 卷二二 五七二・卷二四 七六4)

斃(清)合群平)

斃(平)ケイ 濁(入)瀧)トク 羸(平)レイ 頓(平)トシ 三三・145

(二切 卷一九 五五5)

宥(尤)于三去)

宥(平)クワン 宥(去)イウ 三六・78

(寛宥慈悲分クワンイウ 色葉 中ク量字 79ウ6)

覺(虞)竝平)

覺(平)フ 鴈(去)瀧)カン 六四・22

(二切 卷二 一〇五6)

頻(真)竝平)

頻(平)ヒン 蹙(入)蹙)△\*(入)蹙)□(「蹙」ヲ見消チ訂正) 六六・339

(二切 卷一三 三〇六7)

樹(麻邪去)

臺(去邊)タイ樹(上)シヤ 六〇・110 (他に類例2例)

(一切 卷四麗三七上4)

長(陽開澄平)

臚(平)ヨウ長(平)チャウ 七五・202

(一切 卷七麗四三上22・卷二二三七5)

蒙(東直明平)

蒙(墨平)モウ昧(墨平)マイ 七〇・70

(一切 卷三麗三七上5・卷二三六五1)

摩(戈明平)

僧(墨平)ソウ羯(墨上)キヤ羅(墨上)ラ摩ハ 四二・20

(一切 卷一 四八)

仰(陽開疑三上)

屈(入)クツ申(平)シン俯(平)フ△仰(上)濁キヤウ 二七・12

ここには、仏教教学の場での字音語が掲出されているものと看做される「前田本・黒川本 色葉字類抄」とに見出される語を取った。この内、「玄応一切経音義」には字音振仮名が見られないので、これらの語が「玄応一切経音義」において、漢音読語として掲出されたものか否かは不明である。しかし、本文献の加点者にとっては、教学の場で漢音形で字音読される語として意識されていたものと考えられる。

(俯仰同)フキヤウ 色葉 中フ疊字107オ5)

鑽(去)サン仰(上)濁キヤウ 一七・493

(鑽)去ホメ仰(上)濁アフク同/サンキヤウ 色葉 下サ疊字52オ6)

黙(徳開明入)

宴(平)エム黙(入)ホク 五五・358

(一切 卷六麗四三下3・卷七麗四三下14)

樓(候來平)

樓(平)ロウ櫓(上)ロム 二二・22

(一切 卷二 10四3)

楯(諄邪平)

欄(薄墨朱去)ラン楯(薄墨朱平)シユン軒(薄墨朱去)カン檻(薄墨朱上)濁ケム

三三・12

(一切 卷一 一七六・卷二 10六3・卷六麗四三中7)

一方「色葉字類抄」に見られる語は、日常言語の場で漢音読された語と考えられる。しかし、これらの語も出自は仏教経典と考えられる。そのように考えれば、「色葉字類抄」に見られる語も、本文献の加点者にとっては教学の場で漢音形で字音読される（更には、日常言語の場でも用いる）語と意識されていたものと考えられる。

なお本文献において、実際には更に多くの用例が語として意識されて加点された可能性のあるものと考ええる。

2. 本文献中に吳音形の加点の見られないもの

用例は次の通りである。

聾（東直來平） ↓ 大般若

\*聾（平）リヨウ聾（平）クキ 二七・70

洪（東直匣平）

臚（鍾喻平）

臚（平）ヨウ圓（去）エン 二七・357

臚（平）ヨウ長（平）チャウ 二七・202

玉（燭疑入） ↓ 大般若

螺（上）ラ貝 \*平濁 \*ハイ \*璧 \*入輕濁 \*ヒヤク \*玉（入輕濁）クキヨ

ク（擦消ノ上） 三六・B 172

擁（鍾影三上）

\*擁（去）キヨウ滯（平）タイ 二七・68

癰（鍾影三平）

癰（去）キヨウ瘡（上）△サウ 二一・186

備（鍾喻平） ↓ 法華

備△（平）ヨウ作（入輕）サク 二七・172

容（鍾喻平） ↓ 大般若

容（去）ヨウ納（上）ナフ 三〇・314

庸（鍾徹平）

凡（去濁）ホム庸（平）ヨウ 四〇・15

蕊（脂合日上）

花（上）クエ蕊 \*平濁 スイ（擦消ノ上） 一・317

花（墨朱上）クエ蕊（墨朱平濁）スイ 一六・220

花（上）クエ蕊（平濁）スイ 四六・18

馭（魚疑去）

中△（平）キン△馭（平濁）キヨ 玉云魚據切古御字 二一・114

臨（去）リム馭（上濁）キヨ 二六・C 151

牽（去）ケン馭（上濁）キヨ 二七・209

歩(模竝去)

達(墨上濁)ヲ擡(墨上)ラ歩(ホ)陀(ク) 𠀤・35

窳(入)ソツ歩(上濁)ホ 𠀤・50 𠀤・50

窳(入)歩(上濁)𠀤・50

蒲(模竝平)

訶(カ)理(リ)蒲(墨上)ホ 𠀤・33

蒲(墨上)ホ 𠀤・33

紺(去)コム蒲(平) (某字ニ重書) 𠀤・176

慕(模明去) ↓大般若

饑(墨平)セム慕(墨上濁)ホ陀(墨上濁)ク 𠀤・37

杜(模定上)

杜(上)ト絶(入濁)セツ 𠀤・156

蹄(齊開定平)

蹄(墨去)テイ角(カ)ク 𠀤・278

泥(齊開泥去) ↓大般若

淤(上)ヲ泥(平濁)テイ 𠀤・322

泥(墨去濁)テイ羅(墨上)ラ婆(墨上濁)ハ 𠀤・31

泥(墨去濁)テイ 𠀤・51

\*泥(墨平濁)テイ潦(墨平)レウ 𠀤・298

淤(上)ヲ\*泥(平濁)テイ\*(薄墨) 𠀤・70

祢(齊開泥上)

祢(墨平去濁)テイ摩(上)マ 𠀤・17

醯(齊開曉平)

醯(去)ケイ魯(上)ロ 𠀤・59 𠀤・59

醯(去)ケイ魯(上)ロ 𠀤・59

奚(齊開匣平)

奚(去)ケイ婆(上濁)ハ 𠀤・29

奚(墨去)ケイ魯(墨上)ロ伽(墨上)キヤ 𠀤・35

奚(墨去)ケイ 𠀤・44

桂(齊合見去)

桂(墨去)ケイ 𠀤・59

陞(齊開竝上)

階(去)カイ陞(平)ヘイ 𠀤・98

滯(祭開澄去) ↓法華

疑(墨朱上濁)キ滯(墨朱平)タイ 𠀤・327

擁(去)キヨウ滯(平)タイ 𠀤・68

偈(祭開群三去)

偈(墨去濁)ケイ羅(墨上)ラ 𠀤・49

憤(灰見去)

憤(去)クワイ闊\*(上)ネウ (「丙」ヲ見消テ訂正) 𠀤・53

誼(墨平)クワン憤(墨平)クワイ 𠀤・131

塊(灰溪去) ↓大般若

塊(平)クワイ土(平濁)ト 三六・288

續(仄匣去)

衆(平)シユ續(平)クワイ 二〇・240

盲(平)マウ續(去)クワイ 一三・385

覲(眞群三去)

\* 覲(平)キン竭(入)エツ 一七・453

覲(平)キン迎(平濁)カウ 四四?

瞻(平)セム覲\*(平)キン(某字ニ重書) 四六・461

伛(眞日去)

\* 七(入)伛(去濁)シン 二七・387

均(諄見平)

均(平)クキン 三・177

均(平)クキン調(去濁)テウ 三三・224

均(平)クキン瞻(平)セム 六〇・408

吻(文明三上)

喉(平)コウ吻(平)フン吐(上)ト納(入)ナフ抑(入)ヲク縦(去濁)シユウ

高(去)カウ低(平)テイ 一七・14

脣(平)シシン吻(平)フン 六六・62

竭(月開群三入)

鎖(去)セウ竭(入)カツ 三・22

竭(入)カツ 三・44 三・413

□ シャ 竭(入)カツ 三・72

娑(上)シャ 竭(入)カツ 三・89

竭(墨)入)カツ 四四・73

衰(平)スイ 竭(入)カツ 三・156

衰(平)スイ 竭(入)カツ 三・156

枯(上)コ 竭(入)カツ 六〇・380

鴈(刪開疑去)

\* 亮(平)フ鴈(去濁)カン 六六・22

關(刪開見平)

\* 關\*(平)クワン關(入)ヤク(某字ニ重書) 三三・334

\* 關(平)クワン關(入)ヤク 二一・338

\* 關(平)クワン關(入)ヤク(擦消ノ上) 三三・341 三・348

\* 關(平)クワン關\*(入)ヤク(擦消ノ上)「弁」ニ重書 三三・345

關(平)クワン鑰(入)ヤク 四四・126

關(墨)平)口口防(墨)平)ハウ 三六・B 47

\* 機(上)キ關(平)クワン 三六・B 121

\* 機(入)キ關(墨)平)クワン 五五・392

撰(刪合見平) ↓ 大般若

撰(平)クワン 六六・52

頑(刪合疑平)

頂(去濁)クワン鈍(平濁)トシ 四・12

頑(去)クワン很(上)コシ 六・343

環(刪合匣平) ↓大般若

環(墨平)クワン 四・139

髻(平)ケ環(平)クワン垂(平)スイ鬢(去濁)ヒシ 六・202

艱(山開見平)

\*艱(去)カン難(平)ナン不(上)フ憚(平)タン 六・75

黠(點開匣入)

黠(入)カツ慧(平)エ 四・347

椽(麻直開見去)

主(平)シユ椽(上)カ 一・157

熟(入)濁)シユク△椽(上)カ 七・174

攘(陽開日去)

\*攘(去濁)シヤウ臂(平)ヒ 六・159

壞(陽開日上)

壞(上濁)シヤウ 六・402

惶(唐合匣平)

惶(平)クワウ怖(平)フ 六・198 六・302

澤(陌直開澄入)

蔭(平)ラム澤(入)タク 三・8

霈(平)ハイ澤(入)タク 四・114

潤(墨平)ニン澤(墨入)タク 四・140

潤(墨平)ニン澤(墨入濁)タク皮(墨平)ヒ膚(墨上)フ細(墨入)\*ナン\*栗

(墨平)ナン(擦消軟) 三・297

潤(墨平)ニン澤△タク 二・18

澤(入)懸)タク 四・142

藪(平)ソウ澤(入)タク 六・435

哽(庚直開見上)

\*哽(去)カウ噎(入)エツ 七・580

硬(庚直開疑去)

堅(去)ケン硬(平)カウ 一〇・253

額(陌直開疑入)

侵(墨平)シム鬢(墨平)ヒシ額(墨入)カク 二七・18

赫(陌直開曉入)

\*赫(入)カク奕(入)ヤク 一・51

映(庚拗開影三去) ↓大般若

映(去)エイ蔽(平)ヘイ△ 一八・299

暎(庚拗開影三去) ↓大般若

暎(去)エイ奪(入)聲濁)タク 二・65

映(去)エイ奪(入濁)タツ 一六・295 三三・368 三三・414

映(墨去)エイ徹(墨入)テツ 三三・88

蔭(平)タム映(去)エイ 二四・55

映(去)エイ蔽(平)ヘイ 三〇・193 四一・122 四一・248

映(薄墨朱去)エイ徹(薄墨朱入)テツ 三三・11 三三・39

映(去)エイ奪(墨入濁)タツ 三三・64

窓(平)ソウ闊(入濁)タツ交(去)ロウ映(平)エイ階(去)カイ墀(平)チ

六〇・98

映(墨去)エイ徹(墨入)テツ 六一・354

榮(平)キヤウ映(去)エイ 六六・134

炳(庚拗開幫三上)

炳(平)ヘイ然(去)ネン 四六・133

榮(清合群平)

\*榮(平)ケイ獨(入濁)トク羸(平)ルイ頓(平)トン 三三・145

鈴(青開來平)

鈴△(薄墨朱上)レイ鐸(薄墨朱入)チャク 三三・28

鈴(上)レイ鐸(入)チャク 七六・102

延(墨朱平)エン齡(墨朱去)レイ 七六・459

延(墨朱平)コン齡(墨朱去)レイ 七六・459

秀(尤心去)

秀(墨去)シウ 三三・26

牖(尤喻上)

階(去)カイ砌△セイ戸△コ牖(平)ヨウ 一・41

戸(墨朱上)コ牖(墨朱平)ヨウ階(墨去)カイ砌(墨朱平)マン\*

(薄墨)「セイ」(二重書) 六六・153

窓(平)ソウ牖(平)ヨウ△ 三三・39

窓(平)ソウ牖(平)ヨウ(擦消ノ上) 二四・56

窓(薄墨朱平)ソウ牖(薄墨朱平)ヨウ 三三・19

戸(墨上)コ牖\*(墨平)ヨウ(誤字歇ヲ見消テ訂正) 六六・120

軒(去)カン\*檻(上濁)ケム戸(墨上)コ牖△ヨウ(「ン」ハ「ム」ニ

重書) 六六・323

窓(墨平)ソウ牖(墨平)ヨウ 六六・28

戸(上)コ牖(平)ヨウ 七六・103

誘(尤喻上)

誘(墨上)イウ 四一・117

誘(上)イウ誨(平)クエ\*(「エ」某字ニ重書) 三三・421

誘(上)イウ誨(平)クエ 三三・149

酬(尤禪平)

酬(墨平)シウ 弄・186

宥(尤于三去)

\*寛(平)クワン宥(去)イウ 二六・78

母(侯明上)

娑(墨去)サン母(墨上ホ) 翌・55

候(侯匣去)

候(平)コウ 兵・437

后(侯匣去) ↓大般若

后(墨去)コウ 亮・116

喉(侯匣平)

喉(平)コウ吻(平)フン吐(上)ト納(入)ナフ抑(入)ヨク縦(去濁)シユウ

高(去)カウ低(平)テイ 一七・14

躡(葉娘入)

騰(平)トウ躡(入)テフ 一三・371

鑷(葉娘入)

鉗(墨朱去)カム鑷(墨朱入濁)テフ 七六・175

鹹(咸匣平)

辛(墨平)シン酸(去)シユン鹹(平)カム淡(墨平)タム 二五・271

銜(銜匣平)

銜(去)カム 三・159

劔(嚴見三去)

孤(上)コ矢(上)シ劔(去)ケン戟(入輕濁)キヤク 亮・88

劔(墨去)ケム 弄・471

儼(嚴疑三上)

儼(墨平濁)ケン 七・419

脇(業曉三入)

金(去)コム脇(入)ケフ 二七・334

【漢音・吳音が清濁の違いと考えられるもの】

濯(覺澄入)

浣\*(去)クワン濯(入)タク(浣)ヲ見消チ訂正) 亮・313

擢(覺澄入)

擢(入)タク幹(去)カン 一・146 四・205

擢(墨入)タク幹(墨去)カン 四・222

聳(薄墨朱去)シユウ\*擢タク\*(擦消ノ上・薄墨) 三・62

擢(入)タク 六・199

睡(支合禪去)

徹(入)テツ睡(平)スイ 七・60

垂(支合禪平)

垂\*(墨平)スイ(擦消ノ上) 六・24

嗣(之邪去)

嗣(平)シ位(平)キ 五・27

輔(虞竝上)

弼(入)ヒツ輔(平)フ(入) 423

覺(虞竝平)

\*覺(平)フ 鷹(去)カシ 六・22

屠(模定平)

打(平)チャウ棒(平)ツ屠(上)ト割(入)カツ 五・51

腎(真禪上)

腎(去)シン肝(去)カン肺(去)ハイ 三・236

腸(去)チャウ腎(去)シン肝(去)カン肺(平)ハイ 三・265

腸(墨)去チャウ腎(墨)去シン肝(墨)去カン肺(墨)去ハイ(擦消ノ上)

三・297

頻(真竝平)

頻(墨)平ヒン婆(墨)上瀧(ハ)羅(入)ラ 四・11

\*頻(平)ヒン蹙(入)輕(入)口(威)ヲ見消テ訂正 五・339

脣(諄神平)

脣(平)シン吻(平)フン 六・62

憤(文竝上)

憤(平)フン毒(入)瀧 三・339

忿(文竝上)

忿(平)フン恨(去)ハ\*コン(平)声点擦消 三・326

氛(文竝三平)

氛(平)フン氤(平)フン 六・113 六・10

恨(痕匣去)

忿(平)フン恨(去)ハ\*コン(平)声点擦消 三・326

嫌(去)ケム恨(上)口 五・37

頑(去)クワン恨(上)コン 五・343

緩(桓匣上)

遲(上)チ緩(平)クワン 六・435

浣(桓匣上)

浣(平)クワン滌(入)テフ 五・316

浣(去)クワン濯(入)タク(浣)ヲ見消テ訂正 五・313

畔(桓竝去)

畔(墨)上ハン多(墨)上タ 四・70

鈿(先開定平)

鈿(平)テン廁(上)シ 三・305

拖(歌定上)

拖(平)タ 音輕ノ呼 七・380

藉(麻撥關從去)

藉(上シヤ此(平)△シ 二六・C 165

樹(麻邪去)

\*臺(去濁)タイ\*樹(上シヤ 「射」ハ擦消ノ上) 三九?

\*臺(墨去濁)タイ樹(墨上シヤ 三九?)

\*臺(去濁)タイ樹(上シヤ 〇) 110

射(麻拗開神去)

遍(平)ヘン射(上シヤ 二三・368

腸(陽開澄平)

腸(平)チャウ 二五・236

腸(去)チャウ腎(去)シン肝(去)カン肺(平)ハイ 二七・265

### 3. 本文献中に呉音形の加点の見られるもの

用例は次の通りである。

蒙(東直明平)

\*蒙(墨平)モウ味(墨去)マイ 二七・70

蒙(墨平)モウ 二六・226

〔呉音形〕

蒙(平)ム 三・59 三・367

蒙(墨平)ム 二六・B 21 三・255

普(模傍上)

迷(メイ)權(墨上)ラ普(墨上)ホ 四六・64

腸(墨去)チャウ腎(墨平)シン肝(墨去)カン肺\*(墨平)ハイ(擦消ノ上)

二七・297

長(陽開澄平)

織(平)セム長(平)チャウ 二七・356

\*臚(平)ヨウ長(平)チャウ 二七・202

防(陽開竝三去)

關(墨平)□□防(墨平)ハウ 二六・B 47

騰(登開定平)

騰(平)トウ躡(入)テフ 一三・371

騰(平)トウ溢(入)イツ 二六・341

〔呉音形〕

普(平)フ捷(入)セ□ 一・231

普(平)フ洽(入濁)カフ 一七・517 二六・106

細(齊開心去)

細(墨去)セイ 四六・51

〔呉音形〕

細(平)サイ滑(入)クワツ 四六・177

顔(刪疑平)

顔(墨去濁)カン 三三・297

顔カン貌□ウ 二七・352

〔吳音形〕

顔\*(去濁ケン)〔顔〕ヲ見消テ訂正) 二七・332

摩(戈明平)

\*僧(墨去)ソウ羯(墨上)キヤ羅(墨上)ラ摩ハ 空・20

〔吳音形〕

摩(上)マ醯△(上)△クエ 三・165 (他に類例5例・梵語として)

仰(陽開疑三上)

\*屈(入)クツ申(平)シン俯(平)フ△仰(上濁)キヤウ 一七・12

\*鑽(去)サン仰(上濁)キヤウ 一七・493

仰(墨上濁)キヤウ 五・26

〔吳音形〕

渴△(入)カツ仰△(平聲)カウ 三三・93

黙(徳開明入)

\*宴(平)エム黙(入)ホク 五・358

〔吳音形〕

黙(入)モク 三三・108

樓(侯來平)

\*樓(平)ロウ櫓(上)ロ△ 二・22

〔吳音形〕

樓(上)ル博(入)輕濁)ハク又(平)シヤ 三・71 三・84

欽(侵溪三平) ↓大般若

欽(平)キム風(去)フウ 三・170

欽(墨平)キム 六〇・553

〔吳音形〕

欽(平濁)コム 一八・258

【漢音・吳音が清濁の違いと考えられるもの】

楯(諄邪平)

\*欄(薄墨朱去)ラン楯(薄墨朱平)シユン軒(薄墨朱去)カン檻(薄墨朱上濁)

ケム 三三・12

〔吳音形〕

欄(去)ラン楯(平濁)シユン△ 一〇・79

欄(去)ラン楯(平濁)シユン 三三・78

階(去)カイ階(平)トウ欄(去)ラン楯(金濁)シユン 六〇・102

殘(寒從平)

殘(墨去)サン毀(墨平)クキ 五・25

〔吳音形〕

殘(墨去濁)サン 三七・476

堞(帖定入)

婆(戈竝平)

寶(平)ホウ堞(入)テフ 徒類反 六・374

婆(上)ハ拏(上)ナ 六・349

〔吳音形〕

〔吳音形〕

雉(上)チ堞(入)濁(テ)フ崇(平)ソウ峻(去)シユン 六・77

婆(上)濁(ハ)稚(上)チ 三・252(以下類例一五例・梵語として)

2. 3. に分類したもののについて、沼本氏が「法華經」「大般若經」で「出現する例において全てないし殆どが漢音形で出現しているもの」とされたものと比較してみると、多くの字が一致することがわかる(用例の見出しの漢字の下に法華・大般若と記したものがそれである)。つまり、漢音読字に宗派や經典を越えた一般性が見られる。このことは、これらの漢字の漢音形が漢音と意識されて使用されたものではない可能性を示唆するものであろう。但し、完全に一致するのではなく、沼本氏が指摘しておられるものの内、本文献で吳音形のみが見られるものもある。

## 二 混入漢音系字音より見た新訳華嚴經字音直読の性格

以上のように分類したものの内、当初の問いについて考えるための手掛りを与えるのは、1. 語音として漢音形が使用されたと考えられるものである。本文献は全体として吳音による音読の方針で読誦されたものと見ることが出来る。そのような文献の中に、漢音読として混入する語はどのような性質のものであろうか。先に述べたように、1. に分類とした語は、本文献の加点者にとっては教学の場で漢音形で字音読される語(更には、日常言語の場でも用いる語もある)と意識されていたものと考えられる。

更に、これらの語について声調を見ると、片仮名音形は漢音の形であっても、声調は広韻の体系から外れたものが見

られる。また、広韻の体系から外れていないものとあわせても、前後の漢字と連続した際に日本語として不自然なアクセント（上去、去・去の様な声調の連続）は見られない。可能性としては、これらの語が漢音読の語として意識されていなかったことも考えられる。しかし、熟語形ではないが「顔」についてみると、一方に「ゲン」の振仮名の附された例があつた上で「ガン」と振仮名の附された例において声調が広韻の体系から外れている。つまり、片仮名音形としての呉音・漢音の違いと、声調としての呉音・漢音の違いとが必ずしも対応していないものと言える。この様な声調のずれの生じた個々の原因を明らかにすることは出来ないが、全体として日本語のアクセントとして落ち着きのよい形に移行したものと見ることが出来るだろう。

つまり、本文献の加点者にとつてこれらの語は、教学の場で伝承されて来た語ではあるが、日本語として意識されていた語と考えられる。本文献は全体として呉音による音読の方針で読誦されていると見ることが出来るが、これらの語については、それを呉音読したのでは日本語としての意味理解が出来なくなるものと考えられる。つまり、これらの語については読誦漢字音の呉音としての純粹性よりも語としての理解が優先していると言ふことが出来る。

なお、これらの語が、なぜ仏教教学の場で漢音形で伝承されて来たのかについては、個々の語の仏教教学の中で伝承のプロセスを明かにしていく必要があると考える。ただ、問題を本文献の字音直読に限定するならば、伝承された漢音読語を經典の字音直読の中にそのまま取り入れていることは、經典の字音直読が日本語の範囲内での営為として行われたことを示すものと考えられる。

付け加えるならば、本稿は漢音系字音の混入に焦点を当てているため取り上げることをしていないが、呉音読の部分にも日本語として理解されるものとして音読された語が多く含まれるものと考えられる。

## ま と め

以上のことから、次の様なことが予想される。院政・鎌倉初期以降の仏教経典の吳音字音直読は、経典の中国語による受容を指向したものはなく、日本語の一部として日本語の中に定着した外来語（その中には漢音読語も含まれる）としての日本漢字音を用いた日本語による受容である。

なお、この予想を確かめるためには、更に、漢字音の国語化の現象について広く検討して行く必要があると考える。

## 注

- (1) 拙稿「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴経をめぐって」(鎌倉時代語研究 第十九輯 平成八年八月)
- (2) 拙稿「高山寺藏寛喜元年識語本新訳華嚴経加點字翻刻並びに分韻表」(鎌倉時代語研究 第二十一輯 平成十年五月)
- (3) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』 第一部第一章 吳音資料論——漢音系字音の混入について——(昭和五十七年三月 武蔵野書院)
- (4) 注(1) 論文
- (5) 沼本克明「高山寺藏字音資料について」(『高山寺典籍文書の研究』高山寺典籍文書綜合調査団編 昭和五十五年十二月 東京大学出版会)
- (6) 注(3) 著書
- (7) 一切経音義(上)(中)(下)、一切経音義索引(古辞書音義集成 卷七・八・九・十九 昭和五十五年十一月〜昭和五十九年五月)による
- (8) 注(3) 著書において、沼本氏は大般若経読誦音における語音としての漢音形の混入について、奈良末・平安初期の朝廷による漢音奨励を考えあわせる必要を示唆しておられる。

〔付記〕本稿を成すに当たり、資料の閲覧・調査に関して、高山寺小川千恵御住職を初めとする高山寺御当局の方々の御高配を賜った。また、築島裕先生・小林芳規先生をはじめとする高山寺典籍文書総合調査団の方々には、様々のお導きを頂いた。記して深謝申し上げる次第である。

また、本稿は平成十一年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会における口頭発表に基づいて成稿としたものである。研究集会においては、沼本克明氏より有益な御示唆を頂いた。記して学恩に謝意を表す次第である。